

レインボー新聞

発行元

虹っ子平和スタ
ディーツア
ーin福島2025

進む復興語り継がれる話

東日本大震災の被害と原発の被害



私たちは、14年前に起きた東日本大震災・福島第1原発について、8人で2泊3日の福島の旅へ学びに行きました。この新聞は、私たちが皆さんにいちばん伝えたいことを新聞にしました。原子力の仕組みから新しいエネルギーについて、ふるさとの支援、小学校について、そして、被災した方のお話です。

『虹っ子平和スタディーツアーin福島』中学生6人、高校生2人計8名で7箇所の場所を回り震災から復興までの経緯、福島第1原発について深く学びました。

1日目、東京電力廃炉資料館では、東日本大震災発生後の福島第1原発の様子や、その

後について学びました。また、リブルンふくしまでは、復興に向けた取り組みや放射線について学びました。福島市の町並みは、14年前から時間が止まっている場所もありました。

2日目の原子力被害伝承館では、被災した方の話や当時の様子が分かる写真や展示物を見学しました。浪江町震災遺構では、ガイドさんの案内で戸戸小学校と大平山公園、棚田産業団地を周りました。アクアマリンふくしまでは、水族館を楽しむのはもちろん、当時の苦勞や被災から学んだことを、震災を経験した職員から、お話を

避難声をかけあって

私達の観光バスにガイドさんも一緒に乗って、浪江町の震災当時のまま残っている小学校や亡くなった方の慰霊碑がある場所を案内してもらいました。

3日目、福島市ははとファームでは、福島を今以上に盛り上げる沢山の努力を知り、木戸川漁協では、放射能の影響を受けながら昔の姿を取り戻す努力をお話を聞きました。閉上の記憶では、東日本大震災の影響を聞き、被災者のお話を聞きました。(藤田愛美)

私達も小学校の中に入ることが出来、ガイドしてもらいながら見て回りました。その小学校は2階建ての建物で、津波は一階の天井まで来たので、一階は壁も床もぐちゃぐちゃで、無残な状態でした。先生や子ども達全員生き残ったので、「奇跡の小学校」と言われているそうです。



生徒の1人が山の抜けど道を知っていません。「先生こっちに逃げている道がある」

先生は、生徒を信じてみんまで逃げました。生徒を信じる先生の気持ちと、そこでの判断

原子炉の仕組み



福島第一原子力発電所の発電の仕組みは火力発電と似ており、火力発電でいうボイラーが原子力発電でいう原子炉です。ウラン燃料が核分裂

を起こした際にできる熱を利用して、その熱で水を水蒸気に変え、水蒸気でいうボイラーが原子力発電でいう原子炉です。

次に海から引く張ってきた冷たい海水を筒の中を冷たくしその中に水蒸気を送り水蒸気を冷やして水に戻します。

新たなチャレンジ福島



福島県では、大規模なエネルギー開発が始まっています。太陽光発電で得たエネルギーを水素に変換するとい

水素の開発が進むと輸入に頼らない水素ガソリンの拡大が期待できる。アンモニアの製造も進んでいます。アンモニアは二酸化炭素を排出しないため世界でも注目を浴びており、福島でチャレンジして活動しているそうです。

工夫されている点を挙げるとウラン燃料は放射能を含んでいるため外部には漏れないように分厚い壁で原子炉を覆っているのと、他にも原子炉の動かす主電源をディーゼル燃料に変えられるような仕組みも備わっているため万が一電力を使えなくなったも一時的に動かせる点です。(上野裕)

福島で起きた教訓を忘れずに、私も周りのみんなにも伝えなければと思います。福島では未来に向けた取り組みが始まっています。福島を応援します。(藤谷華音)

断力はすごいと思いますが、慰霊碑は100人前後の亡くなった人のフルネームが彫ってあり高年齢の方の名前がほとんどでした。逃げられなかったことを想像すると、悲しい気持ちになります。いざという時の判断や、普段からの訓練の必要さを感じました。

私達も見習っていきたいと思います。(藤本咲愛)

レインボー新聞

発行元

虹っ子平和ス
ターデイーズ
in福島2025

今も続く震災の傷あと

人・モノ集まらない避難指示区域



東日本大震災の福島への被害は過去から現在にまで及んでいます。津波による家の崩壊や、原発事故による集団移転です。今でも避難指示区域に指定されている地域があり、ふるさとへ帰れない人がいます。人が集まらないことで開発が進まないという問題も抱えています。これらの問題とどう向き合うか考えていきたいと思います。

東日本大震災では、「車を捨ててこっちへ」と呼ばれ、3つの災害に見舞われた。被災地の住民は「地震当時から今までどのように過ごしてきたのだろう」、地震発生直後は、皆逃げることが第一でした。車での避難が多く、道が渋滞していました。歩いていった人々は「車を捨ててこっちへ」と呼ばれる温かい場所だと思っていました。そんな大切な居場所も自然災害で失うことがあります。福島は原発事故で避難指示区域に指定されている場所があり、今も「ふるさと」に戻れない人がおおよそ2万人います。人が集まらない

いことで、家の建設や開発が進まないという問題を抱えています。震災というのは、当時の被害だけでなく、時間が経った今も続いています。この問題を福島だけの問題と考えず、日本全体の問題と捉え、協力し合い、復興のサポートをしていきたいと思えます。(藤本咲愛・津村悠希)

国内外からの支援

東日本大震災は日本に津波や原発事故などの甚大な被害をもたらした。その映像は世界中の人に大きな影響を与えました。その深刻な被害状況が伝えられると世界各地からたくさんの応援や支援の手が差し伸べられ、百六十三万回、地域および四十三の国際機関から支援の申し入れがありました。

在日アメリカ軍の支援では二万人以上、艦船約二十隻、航空機約百六十機を投入した「トモダチ作戦」を実施し、オーストラリア軍機は国内の輸送支援



を行った他、原子力発電所の冷却に必要な特殊ポンプをオーストラリアから緊急輸送しました。

天災と復興



東日本大震災の津波で、福島原子力発電所を廃炉にするために2012年1月に燃料デブリの取り出し工法を検討するためにロボットなどによる調査を開

始し2014年1月に使用済燃料などを開始し2014年12月に4号機の使用済燃料などの取り出し、2021年2月に3号機の

使用済燃料の取り出しが完了しました。2024年には2号機の燃料デブリ試験的取り出しに着手し燃料デブリを取り出し段階的な規模拡大へと進みま

資料館には、台湾や中国、ウクライナ共和国などからのメッセージが展示されています。国内からも小中学校

た。今廃炉に向けての作業を進めています。(上野裕)

福島第1原発事故は東京電力の、現地の職員たちは「私たちの対策不足」と言っています。福島第1原発事故が起きた際、現地の職員は「自然災害から起きる仕方の無い事」と発言せず、「自分達」が自然災害を甘く見ていた」と「防げていた」と「対策不足だ」と、自然の責任にせず自分達の責任にしました。東京電力はこれらことを受け復興に務めています。(藤田愛美)

風評被害に負けない



校による励ましの寄せ書き、メッセージ、折り鶴、紙おむつや子どものおもちゃなどのバナーも目立ちました。今回の災害では、SNSの活用による情報発信など、これまでとは異なる方法の支援が見られたことが特徴です。世界中から福島への復興を願う声が多数寄せられました。(島津彩・喜多方美杜)

福島県では食品の放射線検査が厳しく行われ、安全と確認されたものが出荷されますが、未だに誤った情報や偏見で商品が敬遠される「風評被害」が続いています。この旅では、現地をおとすれ、魚やしらすをいただきます。鮮度と味の良さに驚き、魚は身が引き締まっており素材そのものの旨味を存分に感じられました。資料館の展示では、検査データや流通の仕

組みを学ぶことができ、米や魚のほか、ももなど特産品が豊富で、どれも質が高いことを知りました。実際に食べてみると、そのおいしきは明らかに、うわさだけで敬遠してしまっているのにもったいないと感じました。現地でも得た知識と体験を通して、情報は自分のお目で見えて聞き、確かめたものを大切にするべきだと思います。(矢野夏月)

レインボー新聞

発行元

虹っ子平和ス
ターデイー
in福島2025



アクアマリンの奇跡

リーダーシップとチームワークで復興

福島県には、「アクアマリンふくしま」という水族館があります。そこは、福島県民にとって憩いの場となっていました。3月11日、東日本大震災で大きな被害を受けました。立ちなおすのにもたいてい約30年かかるところリーダーシップ・チームワークなどによって約4か月で復興しました。

「アクアマリンふくしま」では、約20万匹もの生き物を取り扱っています。リーダーシップやチームワーク、絆・協力・援助の3つを意識すること、約4か月で立て直しが完了し、営業再開を果たしました。天井のガラスが割れたり、たくさんいた魚もとても少なくなっ

たりと、立ちなおすの約30年かかるところにも早く、再開することができたので、それは、2つ理由があります。1つ目は、リーダーシップです。当時、社長が「4か月後に（この水族館を）再開する」と言い出したこと

がきっかけです。2つ目は、チームワークです。いち早く再開しようと、社員一人ひとりが被るダメージ、賑やかだった昔の景色はな

ら卒業式を終えればかりの閉上中学校では、14名の生徒が津波の犠牲になりました。そんな中学生達を思い、忘れないうようにと閉上中学校遺族会が、慰霊碑を建てました。慰霊碑は、2018年4月に新しく開校した閉上小中一貫校隣接地の



2つ目、親潮と黒潮の潮境の映えスポットがあります。左右の水の色が違いますので、比べてみてください。福島県の美しい印象より、楽しい気持ちを持って見学に来てください。（津村悠希）

ツアーへ行く前は、自分たちができる対策が分からず、自然災害だからどうしようもないと思っていました。福島県に行くと、具体的な対策がわかりました。堤防を高くして津波の侵入を阻止したり、耐震性を高めたりなど、できることはしていきたく思います。他にも原子炉建屋の壁がとて厚いのに、

水素爆発によっていともたやすく破れることがとても怖かったです。（上野裕）

私はこのツアーを通して、感じたことは失敗したことを次に繋げるとのことです。同じ過ちを繰り返さないよう、次の災害もいつ起きるか分からないから、どう対応するかが大事だと思いました。（津村悠希）

福島での学習を通じて、自然災害の恐ろしさを強く感じるとともに、被害を受けた方々

私の想い①

私はこのツアーを通して、感じたことは失敗したことを次に繋げるとのことです。同じ過ちを繰り返さないよう、次の災害もいつ起きるか分からないから、どう対応するかが大事だと思いました。（津村悠希）

「閉上の記憶」が伝える命の

震災学習の地域拠点

閉上の記憶がある名取市は、2011年3月11日東日本大震災で壊滅的な被害を受けました。以前は、500人以上の人々が住んでいた街は、923人が被害を受け、賑やかだった昔の景色はな

「閉上プラザ」へ設置され、みんなに触ってもらいたいという思いから、丸みを帯びています。閉上の記憶の周りに、日和山や朝市の炉端焼き、名取市慰霊塔

があり、日和山では、実際に新海誠さんが現地に訪れ「君の名は」の舞台地になり、映画の中で、主人公の親友である「名取早耶香」は、避難誘導の放送をしています。（津村悠希・藤谷華音）

は、地震が起きた時油断して逃げなかった名取市の方々に逃げて欲しかったという新海誠さんの想いが込められているそうです。

震災から復興した福島のに驚き、たくさんの努力と工夫を知ることができました。福島県の震災の被害がひどかったという出来事だけでなく、なぜ起こったのか、どう対応しているのか、どうして受けとめていく大切さを学べた旅でした。（矢野夏月）

私は今も、復興活動は他地域からのボランティアの方が中心だと思っています。落ち込み続けるのではなく、その経験を活かして自分たちから出てきたことを発信しており、とても感動しました。（藤本咲愛）

私の想い②



の復興への熱い思いに胸が熱くなりました。防災の大切さも改めて実感しました。（島津彩）

（藤本咲愛）